

「夏目漱石うきは市足跡」記念事業

うきは市ふるさと創生個性あるまちづくり事業において、俳句の創作活動を行うやまたろ句会による「夏目漱石うきは市足跡」記念事業として俳句大会と句碑建立（白壁交流広場に夏目漱石足跡記念句碑、吉井小学校前句碑通りに稲畑廣太郎句碑）が行われ、ホトトギス名誉主宰・稲畑汀子氏をお招きし、選句の表彰式と句碑の除幕式が開催されました。

※稲畑汀子氏、^{いなはたていこ}廣太郎氏^{こうたろう}…明治時代、俳誌「ホトトギス」を主宰した俳人・高濱虚子の孫、曾孫^{たかはまきよし}、曾孫^ひ



小説「吾輩は猫である」などの作品で知られる夏目漱石(1867-1916)は、熊本の第五高等学校英語教諭時代の明治32年1月6日、日田から筑後川を下り千年の渡し場から吉井に入り、札ノ辻辺りに泊まったと言われています。漱石は、当時の吉井ののどかな情景が偲ばれる2句を詠んでいます。

「新道は一直線の寒さかな」

（千年から吉井に向かう人力車に乗っての着想）

「なつかしむ衾（ふすま）に聞くや馬の鈴」

（馬の絵が描かれた宿屋の掛け布団を目にしたの着想）

※広報うきは平成29年12月1号8ページにも紹介



▲ 除幕された「夏目漱石うきは市足跡記念句碑」（12月11日・白壁交流広場）

左側＝ホトトギス名誉主宰の稲畑汀子氏

～夏目漱石うきは市足跡俳句大会～

同記念事業では秋の季題を入れた俳句が募集され、地域から1,360句（1人1句）の応募がありました。小学生・中学生・高校生・一般の4部門で本選（3句）、特選（9句）が選ばれ、表彰を受けました。以下、特選を紹介写真＝12月10日、アルカス吉井での表彰式



【稲畑汀子選 特選】

■小学生の部

星月夜びかぴか光るしづくたち

（妹川小六年 堀江里咲）

めいげつをみればみるほどときわすれ

（大石小六年 舎川小雪）

うきは市の秋の果物がごいっばい

（吉井小五年 梶原有那）

■中学生の部

くやしさを涙を隠す秋の雨

（吉井中一年 善遥）

じいちゃんの汗水吸った新米だ

（浮羽中二年 原裕斗）

宿題の漢字が止まる虫の声

（浮羽中三年 熊懐駿）

■高校生の部

立ちこぎで秋の夜風をすいあげる

（浮羽真館高一年 土屋輝芳）

帰り道肌で感じる冬隣

（浮羽真館高三年 瀬戸璃音）

肩並べ家路を走る赤とんぼ

（浮羽真館高三年 溝上将大）

■一般の部

秋深し暮れてすずめの一人言

（浮羽町 怡土 祐美子）

秋うらら毛槍くるりと高く飛び

（吉井町 田中 秀子）

結願や黄葉明りの寺参り

（久留米市 吉本 恵子）